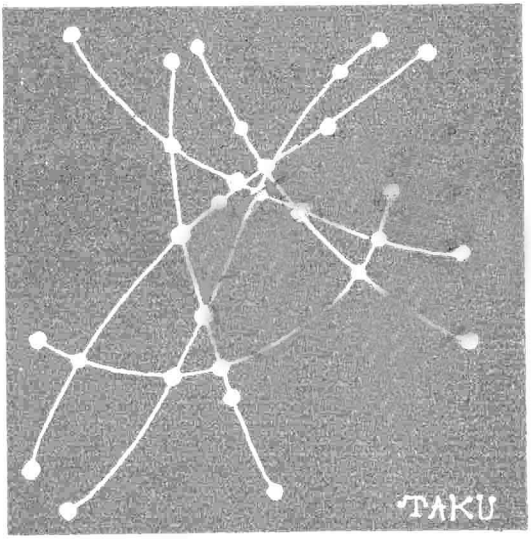
文藝三昧　宇野浩二

愛と死と　廣津和郎

現代日本隨筆選 6

宇野浩二　文藝三昧

廣津和郎　愛と死と



筑摩書房・現代日本隨筆選 6

文藝三昧・愛と死と
— 現代日本隨筆選 6 —
宇野浩二
廣津和郎

發行者　古田晁
東京都文京區台町 9

印刷者　中内佐光
東京都千代田區飯田町 1 の 23

發行所
株式會社 筑摩書房　東京都文京區台町　振替 東京 165768

昭和28年11月20日 印刷
昭和28年11月25日 發行

定価 220円
(地方賣價 230円)

曉印刷株式會社印刷・藤田製本

目次

文藝三昧

心の古里　佐藤春夫　5
母の形見の貯金箱　廣津和郎　15
二つの會　牧野信一　27
勞働祭の日　今は昔の話　39
東方優勝會の日　御前文學論　44
震災文章　近松秋江の思ひ出　51
九月一日・二日（その一）　加藤將軍の思ひ出　123
九月一日・二日（その二）　三上於菟吉と秦豐吉の思ひ出　126

宇野浩二

里見　弴　62

愛と死と

愛と死と　135
父の死　151
おもひで　169
名の知れぬ魚　183
夢殿の救世觀音　191
志賀直哉と古赤繪　196
美術雜觀　203
本郷の宿　209
「藏の中」物語　213
奇蹟派の道場主義　229
幽靈列車　241

廣津和郎

裝幀　岩崎鐸

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.

文藝三昧

宇野浩二

著者紹介

明治二十四年七月福岡市に生れ、五歳から二十一歳まで大阪で過した。明治四十四年早稻田大學文科に入學したが中途で退學。初め螢話や少女小說を書いたが、大正八年「蹉の中」「苦の世界」を發表して文壇の注目をひいた。「千萬考人」「子を貸し屋」「心づくし」「軍港行進曲」など市井の作家としてユニイクな作風は昭和二年に極度の神經衰弱にかかった時までつづき、昭和八年以後再び「子の來歷」「枯木のある風景」「枯野の墓」「夢の通ひ路」「器用貧乏」等の名作を著した。戰後「思ひ草」「思ひ川」「大阪人間」「芥川龍之介」等の力作を示し〈文學の鬼〉としての活動は衰えない。

心の古里

身世誰か吾が鄉の洵美を謂はざる者ある、靑ヶ島や、南洋浩渺の間なる一頃の噴火島、爆然罅裂、火光熠々、天日を燒き、石を降らし、灰を散じ、島中の人畜殆んど斃れ盡く、僅かに十數人の船を艤して災を八丈島に逃れたるあるのみ、而かも此の十數人竟に其の噴火島たる古鄉を遺却せず、火の熄むを待つこと十三年、乃ち八丈島を出で、欣々乎として其の多災なる古鄉に歸りにき。占守や、窮北不毛の絕島（千島の內）、層氷累雪の處のみ、後、開拓使有司の其の土人を南方色丹島に遷徙せしむや、色丹の地、棋楠樹靑蒼、落葉松濃やかに、黑狐、三毛狐、その蔭に躍り、流水涓々として處々に駛り、玉蜀黍穫べく、馬鈴薯植うべく、田園を開拓する者は賞與の典あり、而かも遷徙の土人、新樂土を喜ばずして、歸心督促、三三五々時に其の窮北不毛の故島に返り去る。……

これは、志賀雷島の名著『日本風景論』の最初の一節であるが、この文章は、今から數十年前にはじめて讀んだのであるが、いつまでも、今日までも、ふかく私の頭にのこつてゐる。

今は、もう、かういふ事を知つてゐる人はすくないであらうが、十數年前までは、ほとんど毎年、秋の颱風の季節になると、東京の本所深川へんには、かならず、（といつてもよいほど）大水が出た。それは、そのころ、その本所に住んでゐた伊藤左千夫が、かういふ歌を作つてゐることでも、その大體が察しられよう。

牀のうへ水こえたれば夜もすがら屋根の裏べにこほろぎの鳴く

水やなほ增すやいなやと軒の戶に目印つけつ胸安からず

これは、歌であるから、讀む人によつては、いくらか實感がうすく感じられるかもしれないが、その頃、かういふ大水が出ると、その翌日あたりの各新聞に、「床下何寸、何

千戸、床上何寸、何百戸、」などといふ記事と、さういふ水害に遭つた人びとが、あるひは、腰のへんまでつかる水の中を、あるいたり、あるひは、水が軒の下ぐらゐまでひたつてゐる町を、船で往來したり、してゐる寫眞などが出た。

その頃、かういふ記事を讀み、かういふ寫眞を見るごとに、山の手の高臺の町に住んでゐた私は、どうして、本所深川の人たちは、もつと安全な所に、越さないのであらうか、と、よく考へたものであつた。

しかし、いつの時でも、本所深川の人たちは、水の引くまで、何日間か、はうばうに、どこかに、避難してゐても、いつとなく、かならず、元の自分の住み家に、もどつて行く。

たとへば、前にのべた、左千夫は、その時分、ずつと本所の茅場町で、牛を飼ひながら、牛乳屋をしてゐたが、數年のあひだ、何度も何度も、大水にあひながらも、そのたびに、恐ろしい目にあつたり、水害のための疲れから、病氣になつたり、ある時は、兩國の國技館まで、家族と牛どもを連れて行つて、そこで一と月以上も假りずまひをしたり、しながら、けつきよく、元の住み家に、歸つて行つた。

もとより、本所深川の何萬といふ人びとは、左千夫などとは、くらべものにならぬほど、來る年も來る年も、秋になれば、水害のために、たとへやうのない苦難をなめ、——家財道具を水に流したり、ひどい時は、怪我人ばかりでなく、死人を出したり、しながらも、けつきよく、避難した先きから、それぞれ、元の、自分の家に、もどつてくる。

さうして、水害のために、こはれた所をなほしたり、ぬれた家財道具や疊などをかわかしたり、その他、いふにいへない、きたない思ひをしたり、して、又、元の所に住みついて、『ふだん』のとほり、日々の『いとなみ』を、はじめる。

かういふ事を、見聞きするごとに、私は、いつも、あの志賀重昂の文章を、思ひうかべて、いかに、日本の人びとが、『吾が鄕』を、心の底から、愛してゐるか、と思ひいたつて、ふかい感激をおぼえるのである。

この秋の颱風におそはれるたびに、本所深川へんで、大水の苦難をなめながら、避難さきから、いつとなしに、おのが古里にもどる人びとの事をおもひ出すと、私は、いつも、あの、大正十二年九月はじめの、關東の大地震のと

き、東京で災禍にあつて、住み家も、家財道具も、ことごとく燒かれ、その上、親兄弟（あるひは、妻子）を失なつた、何萬（あるひは何十萬）の人びとの姿を、ありありと、思ひ出す。

私は、あの大地震のとき、上野公園のすぐ近くに住んであたが、あの邊は、地盤がよいので、倒れた家は一軒もなく、火事もおこらなかつた。

それで、私は、夕方、すこし氣もちも、おちついたので、樣子を見かたがた、公園のほうへ、出かけて行つた。

さうして、公園のなかの、下町のほうから避難してきた、何千（あるひは何萬）とおもはれる、人と荷物の雜沓してゐるあひだを、くぐりぬけるやうにして、下谷、淺草、その他を見おろす位置にある、崖の上のほうへ、近づいて行つた。

その崖の上のほうへ近づく前に、すでに、東の方、遠くは、本所、深川、それから、外神田、日本橋、その他の方面、ちかくは、下谷、淺草、その他、ほとんど三方が、一面に、燃えさかつてゐた。

上野公園には、おもに、下谷、淺草、本所、その他の人びとが、避難してゐたが、その日から、一日、二日、三日、と、日がたつにつれて、郊外か、市外か、あるひは、ちかい田舍の、緣故さきか、知人あるひは友人の家を、たよつて行くらしく、ほとんど朝から日の暮れちかくまで、大通りはもとより、裏通りを、横町を、三々五々と、とほつて行つた。

たつた一人で、あるひは、夫婦づれ、あるひは、親子づれらしいのが、二人づれか三人づれで、たいてい、『きのみきのまま』で、日に燒け、埃によごれた顏をして、いづれも、默默と、口をむすんで、思ひおもひの方角へ、とぼとぼと、あるいて行く。

私は、かういふ人たちと、行きちがふごとに、なんともいへぬ、たのもしい氣がした。かういふ人たちの顏つきに、底のしれない、辛抱づよさ、しぶとさが、あらはれてゐたからである。

やがて、あの大地震の日から、三日、五日、と、日がたち、五六日すぎると、燒け跡が、すこしづつ、しだいに、整理されてゆき、ところどころに、簡單なたべ物を賣る屋臺店があらはれたり、その他、必要な日用品をあきなふ露店が出たり、するやうになつた。

その時分のある日の夕方、私は、燒け出されて、ある神社の境内に避難してゐた友だちを見まひに行つて、おもはず話しこんだので、歸り道の途中から、すつかり日が暮れてしまつた。日が暮れてしまふと、燒跡はほとんど眞暗になつた。その暗いなかを、ゆつくり、たどりながら、あるいてゆくと、ところどころに、地べたの上あたりに、ほのかな『あかり』が、ちらと、見える。

その、ほのかな『あかり』のさす側をとほると、人のゐる氣はひがするので、暗がりの中をすかしてよく見ると、そこに、掘つ立て小屋のやうなものが、できてゐる。さうして、そのほのかな『あかり』は、その掘つ立て小屋の入り口のちかくで、おそい夕食の仕度をしてゐる、七厘の火であつた。

また、ある所では、かたはらの暗がりの中から、ふいに、金槌の音がしたので、おもはず、立ちどまつた。

さうして、闇をすかして、音のする方に、目をこらすと、簡單なバラックが、おぼろに、見えたので、また、あるきかけると、ふと、そのバラックの板と板とのすき間から、ちらちらする『あかり』が見えた。それは、たぶん、はだか蠟燭の『あかり』で、棚でもつるために、釘をうつてゐるのであらう。

さて、かういふ話しは、その當時、あまり外に出あるかなかつた私が、あるいた範圍で、見聞きした、ほんの二三の例である。

しかし、私は、かういふ光景に接したとき、やはり、日本の人びとの、はかりしれない、辛抱づよさ、底ぢから、古里に對する愛のふかさ、——たとへば、この大震災の場合でいへば、自分の住み家が、燒けても、燒かれても、また、自分が裸一貫になつても、そのために、たとひ、一時は、遠くか近くの、縁故さきか、友人か、知人か、どこか、安全な、居心地のよい所に、避難しても、いつとなく、元の、燒け跡の、自分の住み家のあつた所に、歸つて行く、——つまり、裸一貫から立ちあがる根づよさ、古里に對する愛のかぎりない深さ、などといふ事に思ひいたつて、私は、やはり、ふかい感激をおぼえるのである。

ある日、——空襲の災禍のあつた日の翌日、——用事があつて、上野公園を通りぬけて、その近くの町をあるいてゐると、罹災した人たちが、大通りはもとより、裏通りを、横町を、三々五々と、行きかうてゐた。

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.

たつた一人で、あるひは、二人づれ、三人づれ、で、いくらかの荷物を、せおつてゐる人、手にさげてゐる人、なにも持つてゐない人、――つまり、『きのみきのまま』の人、――顔や手に燒傷をしてゐる人、びつこを引いてゐる人、その他、――かういふ人たちが、默默と、口をむすんで、おもひおもひの方角へ、とぼとぼと、あるいて行く。

かういふ『ありさま』をながめて、私は、二十二三年まへに、やはり、上野公園とその近くの町で、これとほとんど同じ光景をながめたことを思ひ出した。

それは、もとより、こんどの場合と、二十二三年前の災禍とは、時勢も、事情も、まつたくちがふけれど、いま述べたやうに、男も、女も、老人も、子供も、申しあはせたやうに、一と言も口をきかず、默默として、行きかふ姿は、二十二三年前のときも、今度の『場合』も、ほとんどまつたく同じ光景である。

さて、かういふ光景に接しながら、とある町角にさしかかると、南の方からと、西の方からと、あるいて來た『きのみきのまま』の、罹災者らしい人が、その町角で、ふと、顔を見あはすと、どちらから先きともなく、「やあ、」「やあ、」と聲をかけあつてから、立ちどまつて、かういふ問答をかはした。

「あんたのお宅は。」「丸燒けです。」「しかし、御無事で、結構でしたね。」「あなたの方は。」「あたしの方も、やつぱり。」「しかし、御無事で、なによりでしたな。どうぞ、お大事に。」「あんたも、お大事に。では、さよなら。」

これだけの言葉をかはすと、二人は、さつさと、北の方と、東の方へ、あるいて行つた。

私は、かういふ言葉を、まるで時候の挨拶でもするやうに、簡單にかはして、あつさりと、右と左にわかれて行つた、この二人の態度にも感心したが、それ以上に心を打たれたのは、この時の二人の顔つきに、悲しみとか、くるしみとか、さういふ感情の影がすこしも見えず、――思ひきりがよいといふか、あきらめがよいといふか、なんともいひやうがない、――實に、さつぱりしてゐた事であつた。

その日から二三日のち、私は、用事があつて、長野に行くために、上野から、信越線の汽車に乘つた。

汽車は、その頃の例のとほり、滿員以上で、乘客の七分どほりは罹災者で、その罹災者の大部分は地方に轉居する人らしい。

汽車が、大宮を出て、しばらく行つた頃、私が立つてゐるすぐ側の席に腰をかけてゐた女と、その女と筋むかひになる位置の通路にしやがんでゐた男とが、話しをはじめた。その話しのなかに、かういふ問答があつた。

「……たうとう、淺草の觀音さまも燒けてしまひましたね。」「あれはほんとに惜しいことをしたね。あの觀音さまは、日本ぢゆうにひびきわたつてるからね。」「わたしのうちは、あの觀音さまの裏通りで、わたしは、小學校にかよふのに、毎日、行きと歸りに、二度、あの觀音さまの境内をとほりましたので、……悲しいですよ。」「わしのうちは藏前だから、わしは、その日の仕事が、無事につとまるやうに、と、毎朝、降つても、照つても、おまゐりしてたもんだから、わしや。くやしいよ。」「藏前なら、あなたのお宅も、丸燒けでせうね。」「むろん、丸燒けさ。しかし、負けをしみでなく、なにひとつなくなると、かへつて、さつぱりして、氣樂になるね。」「ほんとに、さうですね、かへつて、氣がつよくなりますね。……あなたのお仕事は。」「食糧營團。あんたは。」「小工場につとめてゐます。」「田舍へこすの。」「いえ、高崎の姉のうちで、長わづらひしてゐる母をみまひに行くんです、一日やすんで。」「へえ、わしも、親父が急病で、上田の兄のとこまで行くんだが、明日は、東京に歸るよ、……やつぱり、東京はいいからな。」「ええ、さう、わたしも、どんなに苦勞をしても、東京でくらすつもりです。……東京は、なつかしいですね。」

私は、この、單純な、素朴な、問答を聞いて、「やつぱり……」とおもつて、目頭のあつくなるのをおぼえた。

私は、今、松本市外の、ある田舍家の二階に住んでゐる。六月の末に、東京からこして來てから、もう三月あまりになる。

部屋の二方に窓があつて、机は北むきの窓のそばにすゑてあるが、その窓はひろく、その窓の前に小さな緣がついてゐるので、そこから西の方をながめると、すぐ近くに飛騨山脈が見える。

それらの一萬尺にちかい山山のなかで、もつとも近くに見える、霞澤岳などは、毎朝、顏をあらふ井戸端で、晴れた日なれば、かならず、目にうつる。さうして、その霞澤岳の左に、長塚節が、

鴉のこゑ透りてひびく秋の空にとがりて白き乘鞍を見し

乘鞍はさやけく白しにごりたるなべてが空に只一つのみ

などと、空想でよんだ、乘鞍岳がそびえてゐる。

その乘鞍岳は、もう十日ほど前から、節が空想したとほり、もう、「白き乘鞍」になつてゐる。

私が、毎朝、顏をあらふ井戸端から五六歩ほど西に行くと、田圃がある。齒楊枝をくはへながら、田圃道に出ると、西の方に、飛騨山脈がそびえ、東の方に、筑摩山脈がながめられ、南と北は平野、――つまり松本平をなす平野であるが、南の方にも、遠くに、木曾の山山が見える。

この風景は、ほとんど山のながめられない東京に三十五六年も住みついてゐた私には、憧れにちかいものであり、日本の景色としては大きい方であらう。

さて、かういふ所に、住み、おちついて勉强のやうな事もでき、不自由ではあるが、まづ無事にくらしながら、私は、さきに述べた信越線の汽車の中の男女の問答の最後の言葉のやうに、一日のうちに、何度か、東京をなつかしく思ふ。

私が東京で二十七八年も住みついた家は、災禍にもあはず、まだ本その他が殘してあるので、戻らうと思へば、歸れるのであるが、もし歸るとしても、その家には戻るつもりはない。

ただ、東京をおもひ、その家の事などを思ひ出すときに、妙に、もつとも、印象的に、おもひ出し、頭にのこつてゐるのは、ときどき散歩した、谷中の墓地の一劃である。それは、寛永寺の北側の門を出て、櫻の並木道をとほり、五重の塔の上の方がすこし見え出す邊を右にまがつて、陸橋にかかるまでの間である。

その僅かな距離のあひだに、三月の初め頃から、兩側の並木の櫻の芽がすこしづつ赤らみ、やがて、その花がさき、その花がちり、散つた花瓣が地上を色どり、葉櫻の季節になり、青葉の頃になる。それから、秋のはじめ頃になると、小道のまがり角に、三箇所ほど、百日紅が植わつてゐるので、その道をあるいて行くと、おもひがけない所で、あの、何ともいへぬ、可憐な、綺麗な、紅色の、百日紅の花が咲いてゐるのに、目を見はる。

しかし、これは實に小さな景色である。しかし、日本の美しいといはれる景色は、日本三景にしても、各地方にあり過ぎる程ある、なになに八景にしても、その土地の大小にかかはらず、みな、妙にまとまつてゐるので、大きいと

か、雄大とか、いふ趣きのある所は、幾らかはあるけれど、ほとんどない。

私がかういふ事を考へたのは、去年の秋の中頃から、むかし愛讀した明治大正の文學のなかで、ことに愛讀し、頭にのこつてゐる作品について、なるべく系統をたてないで、思ひうかぶままに、書いてみたい、とおもひ立つて、手あたりしだいに、いろいろな作品を讀みかへしてゐるが、二た月ほど前に、永井荷風の、『あめりか物語』のうちの『夏の海』のなかに、かういふ一節を讀んだ時からである。

……日本であると、ずゐぶん遠い山里に行つても、土地は多く開拓されつくしてゐるので、何となく浮世の風の通うてゐる氣がするけれども、さすがは米大陸の廣漠たる、町から二マイルを出るならば、何處へ行つても、かういふ無人の境が現れ、……

これはほんの一節であるが、その頃（明治四十年頃であるから、今から四十年ほど前）の荷風は、このほかにも、アメリカの景色の偉大な事をいたる所で述べてゐる。しかし、荷風は、その後、日本の（ことに東京の下町の）特殊の風物に心をひかれ、それが四十年ほど後の今日までつづいてゐるけれど、四十年ほど前の自由を愛し武力を憎んだ氣もちは今もすこしも變らないやうである。

それは、おなじ『夏の海』のなかに、かういふ文章があることだけを見ても、わかる。

途中で日は西に落ちたので、大西洋上に燃ゆる夕炎の美しさを見つくし、徐ろに紐育の港口に近づく頃には、逸早くかの自由の女神像の高く差し上げた手先に、一點の燈明の輝き初めるのを認めた。つづいて、夕波高くみなぎる彼方に、山脈のやうに空を限る紐育の建物、ブルックリンの橋上無數の碇泊船、引きつづく波止場々々々の燈火の、一齊に輝きわたるさま、日のうちに眺めた景色よりも、更に美しく更に意味ふかく見えるのである。紐育の港の入り口に立つてゐる自由の女神像の照らす燈明の光りを、「更に美しく、更に意味ふかく見える」とのべ、「孔子の敎へだの武士道だのと云ふものは、人生幸福の敵である、」と考へ、封建制度を極端に憎んだ荷風が、明治四十三年に、創刊して、編輯兼發行人になつた「三田文學」の第一卷第二號に、荷風とは性格も生活もまつたく違ふけれど、荷風などと近い考へをいだいてゐた、その頃

の新進作家であり、詩人のやうな情熱をもつてゐた秋田雨雀が、「坂下の街」といふ文章を出してゐるが、その中に、かういふ一節がある。

彼が目をあげて石垣の上を見つめると、灰白色の勞働服を著た一體の兵士が、日にやけた赤黑い頰をふくらして單調な譜を吹いてゐる。この譜は、多分一八九四年と一九〇五年の兩度のいくさに吹いた勇しい記念の譜でもあらう。

戰爭を避けることの出來ない憐れな島帝國の國民は、この靜かな午後、人は皆な仕事の机をすてて休息のお茶を飲む時、やつぱり眞鍮の管の中に忠義の譜を吹き入れなければならない。……

これは、前に述べたやうに、今から三十五六年前に書かれたものであるが、その頃はもとより、いま讀んでも、文章も、考へ方も、新らしい感じがする程であるから、これを、二十歲の時分に、讀んだ私は、何度かくり返して讀んだくらゐ、感激した。

この文章のなかの、「一八九四年と一九〇五年の兩度のいくさ」といふのは日淸戰爭と日露戰爭のことであるが、二十歲の私が、その當時、この一節を讀んで、もつとも感心したのは「やつぱり眞鍮の管の中に忠義の譜を吹き入れ」るといふ、まつたく新らしい表現（あるひは考へ方）であつた。

しかし、私は、この靑年時代に感心した上に今まで頭に殘つてゐる文句を、長いあひだ、文章に書くことが出來なかつた。書いて發表すれば、すぐ禁止されることがわかりきつてゐたからである。

「禁止」といへば、永井荷風が、たしか、明治四十二年の四月頃、出版することにきまつてゐた、『ふらんす物語』が、その內容の十何篇のうちで、『橡の落葉』（三篇の小品から成つてゐる）のために、せつかく一册の本として印刷が出來あがりながら、發行する前に、印刷所で發賣禁止になつたために、「世人の目に觸るることなく、埋葬せられ」たが、三册だけ流布した、といふ傳說がある。

しかし、これは、『傳說』でなく、本當であつたので、私は、その『橡の落葉』を讀んで感激したのである。その感激したものの中のほんの一部分を右にうつさう。（なほ世に流布してゐる『ふらんす物語』はその『橡の落葉』（その他）を拔いたものである。）

眺ふ巴里の都にも、西東、北南の淋しき四隅には、黑杉（シイプレエ）

の木繁りて、冷たき石連りし死の國あり。この國は世の常のさまとは異りて、富貴權門の人よりも、畫伯詩人が名の前に、百花爛漫として、嚴冬なほ陽春の色を絕やさず。

西の方、ラシェエズの墓地は、その入口に築きし、『死者のかたみ』の彫刻、名高ければ、心なき遊覽の旅人さへ、來り訪ふもの少しとせず。

ここに、吾は、ミュッセが墳墓の石に、『親しき友よ。われ死なば、柳を植ゑよ。わが墓に。』と云ふ名高き其の詩を彫み、一本の柳をさへ植ゑたるを見て、フランスの國民が、一代の詩人を愛する事の如何に深きかを思ひて泣きたり。ミュッセに隣りては、フランスの樂壇に、『セビルの剃師』を傳へたるロッシュの墓ありしをも吾は忘れず。『死者のかたみ』のほとりを昇り行けば、霞わたる巴里の眺め繪の如く、繁りし黑杉の木立に、土しめりて、豊なほ暗き處、モリエエルはラフォンテェンと並びて休み、新しきドオデエの像を組み入れし大理石の面には、銅にて、そが名著の題目を連ね出したり。バルザックは彼方はるかにして訪るに難く、ボオルマルシェエの墓、また遠く、羊腸たる石徑を辿らざるべからず。

これも、やはり、今から三十七八年前に作られたものであるが、文語體でありながら、いま讀んで、新らし味がある。

もつとも、さきに引いた雨雀の文章も、この荷風の文章も、ともに、この二人の二十七八歳の時分の作であり、それを讀んだ私が二十歳前後の頃であるから、作者にも、讀者にも、情熱があり、若さ（と新鮮味）があつた。ともいへるけれど、三十五六年を過ぎた今、讀みかへしても、おなじ感激をおぼえるところに、すぐれた文學の尊さがあり、文學の不朽さがあるのである。

しかし、さういふ理窟などは別として、かういふ文學を讀みかへすと、（かういふ文學だけでなく、あらゆるすぐれた文學を讀みかへすと、）私などには、なんともいへぬ懷しさが、しみじみと感じられる。

その上、いふまでもなく、これは私だけが感じるものではない。一と口にいふと、文學は、作る人にも、讀む人にも、たとひ、『何者か』のために、長いあひだ、作る事も、讀む事も、さまたげられても、それが長ければ長いほど、懷しくなる。それは、「我田引水」や、「こじつけ」などではなく、文學はあらゆる人びとの『心の古里』であるから

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.